

TALES OF NEXUS~テイルズオブネクサス~

瑠璃。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そう、それは一台のピアノから始まった。

レムリア国の式典、天星式ではこの地の今の平和が先にも続くように願うため

必ず行われるピアノ演奏がある。選ばれた者はこの時代の平和の顔となるという。

今年選ばれた少女ノエル・ステラ・メビウスだった。

しかし彼女はこの式典の正体を知り、この平和の正体を知る。伴奏者は真なる平和の為に音を奏でる。自らの決意で。

目次

e p 1	「混乱に次ぐ混乱」	1
e p 2	「幼馴染」	5
e p 3	「奏者と元軍人」	10
e p 4	「盗賊に間違われて」	14
e p 5	「大迷宮ラビリンス」	19
e p 6	「青の恩寵」	22
e p 7	「絶水剣」	26
e p 8	「力の発端」	30

e p l 「混乱に次ぐ混乱」

全ては神より授けられ、人はその恩寵を育てたに過ぎない。

平和も彼らによつて与えられ、人はそれを守るのが責務なのだ。

だが与えてくれた神々に感謝をしなければならぬ。我ら人は罪を持つ。

だから我らの声で歌うのではなく、神が授けた恩寵で返す。

それがレムリア国最大の式典、天星式である。四年に一度、一人の奏者が選ばれて奏者は音を奏でる。

「ほ、本当ですか!？」

自宅にいたノエル・ステラ・メビウス。彼女のもとにやって来たのはレムリア国軍の

軍人たちだ。式典奏者は重要な人間と言うこともあり、軍部で式典終了まで

留められる。

「ええ。今すぐに身支度をしてください」

急な話だが、ノエルはせつせと支度をする。式典まで後一週間。荷物を

抱えて軍部拠点が併設されている城に向かった。軍の馬車に乗り込む。

馬車は真つ直ぐ城へ。窓の景色が次々と流れていく。式典奏者はどんな

奏者も憧れるが、中には黒い噂も聞く。式典後に奏者を見た者はいない。

帰って来て、すぐに事故で死ぬ。不穏な噂もあり、ごく一部では式典奏者は

呪われるとも言われる。奏者が弾くピアノに何かしら呪いが掛けられているのでは？

そう噂されていることもある。これらの噂の真偽は不明だ。

城に到着して鍛えられた兵士たちが荷物をせつせと部屋に運んでくれた。

「貴方の部屋の隣は軍隊長の自室でもありますので、決して騒がぬように」

「分かりました。気を付けます」

軍隊長はもっと遅しいのか？巨漢？分からないが静かにしていれば何も起こらない

だろう。部屋に荷物が置かれていた。

「あ、あの…電話を使っても良いですか？」

「良いですよ」

許可を貰ってから電話を利用する。

『ノエル、聞いたわ。奏者になったんですってね』

優しい声色、ノエル・ステラ・メビウスの母だ。イリーナ・ルナ・メビウス。

「うん。でも、恥ずかしいや…もつと凄い人はいるのに」

『それでも選ばれた。きっと実力以上に理由があるのよ。頑張れ、ノエル』

「…ありがとう、お母さん」

電話利用時間は短いが、それでも心が落ち着いた。母親の言葉は娘の心に

案内響くのだ。その後耳に入ったのは隣室の会話だった。扉に耳を近づけ、

集中する。単語は幾つか聞こえるが、内容は分からない。話し声が消え、足音が

聞こえ慌ててノエルは自室に戻った。

夜になり、兵士たちが眠りにつく頃。ノエルは部屋を出た。窓が開いていたからか

下の階から音が聞こえた。耳は良い方だ。これはピアノを奏でる音。下の階、

大広間に用意された真っ白なグラウンドピアノを弾く手を止めた男はノエルに

気付いた。

「やはり、貴方が奏者なのね…」

自分に似た女性がいた。彼女の言葉が気に掛かった。『やはり…?』

「やはり…とはどういうことですか?」

「貴方も聞いた事があるでしょう。奏者の失踪、そして事故死…今や一族は貴方しか

残っていないのです」

「一族って…でも母は生きています!メビウス家は父親以外、娘と母が健在だよ!」

勝手に家族を死人扱いされるのは気分が悪い。だが目の前の彼女は真剣だった。

嘘偽りない、そう言う顔をしている。

「明日…貴方の母は火災で死ぬ。迷う時間は無い。明日のこの時間、貴方も

危険に晒される。その時、ここに来て」

「何をしているのですか、ノエル嬢」

ノエルはハツとする。振り向くと一人の男がいた。鋭く、こちらの腹の底を

探るかのような目をしている。彼には女性が見えていないのか?

気付くと彼女の

姿はそこには無かった。

「本番に弾くピアノを、まだ見ていなかったと思ひまして…綺麗ですね」

「当たり前です。このピアノは本番の為に作られた重要、神聖な楽器です。

貴方も重要な方です。よく眠り、御体を大切にしてくださいらないと」

「…そうですね。では、私はもう眠ります。おやすみなさい」

ノエルは足早に自室のベッドに倒れ込んだ。不思議な女性だった。母親にも自分にも

似た容姿の女性。否、自分が後数年もすれば彼女の様になっているのではないかと

思ってしまうほど……。待てよ、有り得ないとは思いますが未来の自分に？

もし彼女が未来の自分であるならば、明日に起こる事を知っているかも。

眠りにつき、目を覚ました時には日が昇っていた。

「の、ノエル様！悲報ですが……つい先ほど、貴方のお母様が火災に巻き込まれたとの

事です……！」

兵士の一人が報告した母の死。先の女性が言った言葉は事実だった。ならば、次に

危ないのは自分だ。突然の悲報の次は式典に関わる事件だった。

「ピアノが……!?!」

無残に碎かれたピアノと、そこに転がる人間。男。彼がピアノを破壊し、そして

自殺したというのだ。何が目的でこのようなことをしたのか分からないがこれでは

式典を開催することは出来ない。

「ちよつと、なんで奏者が二人もいるのよ!?!」

「なっ、二人だと!?!」

待て、何故揃いも揃って全員がこれを信じているのだろうか。ノエルは超人的な

聴覚を持っている。これは、嘘の音だ。魔術も駆使しているのか幻術らしい何か

が使われている。混乱している場を収めるのは難しいだろう。

e p 2 「幼馴染」

ようやく外の息を吸うことが出来た。

「ごめんなさいね、苦しかったでしょう？」

女性が声を掛けた。その容姿はノエル・ステラ・メビウスがもつと大人になった

姿。彼女は頬を緩めた。

「流石、私。もう正体に気付いちやっただ？」

「：やっぱり未来の私なんだ」

「20年後の、ね。未来は一つの過去から星の数ほど存在する。私はそのうちの

一つに過ぎない。二人目の奏者が現れ、私は命辛々その場から逃走することに成功

した私。そしてここは私の未来を再現した場所」

未来のノエルはこの世界について説明する。近代的な景色が多い今のレムリア国とは

違い、異界のようだった。

「そう言う風に創ったのよ。直した、そう言っていた。あのピアノ、正体は

何だと思う？」

未来ノエルの質問に今の自分が分かるはずも無かった。あの純白のピアノは

奏者の魂も肉体も消し去りマナにする力を持つ禁忌グリムリパーという。

それにより多くの人々の命が水面下で静かに奪われていた。長い時の中で

計画は常に進行し続けていたらしい。そこでもっと効率的に多くのマナを

回収するために体内にもっと多くのマナを保持する者を選んでいった。

「見て」

「ッ!？」

天空から一転、大地には人間がいた。しかし彼らの表情に笑顔はない。あるのは

苦しみだけ。天空にも人間はいると言うのに、どうということなのか。

「天に相応しい者を選別した。選ばれた者は天で幸せに、楽に暮らせる。だけど

相応しくない者は一生恵まれないの。天の為に働き続ける…残酷な話」

「人を選んでるんだ…」

「ええ…人の価値は他人では決められないわ。弱い立場の者を守る実力主義が

悪い方向へ進化した、そのなれの果て―」

パキツという音と共に空間に亀裂が走った。その亀裂が広まり、空間に穴が

出来た。

「行つて！私は未来、過去があれば私は何度でも蘇ることが出来る。けど…」

この未来を変えたいの。任せたわよ―私^{ノエル}」

何処に続くか分からないワープホールに体を吸い込まれる中、凜々しい未来は

過去を守るために戦っていた。手を伸ばしてもその未来を掴むことは出来なかった。

未来ノエルは男と対峙していた。

「ガムシヤラに別の場所に転移させたか…だが、分かっているはずだろ？ノエル。」

未来のお前だろうが、現代のお前だろうが俺には勝てない」

「ええ。だけど未来を消しても無駄よ」

「心配いらぬ。過去のお前も消し去ってやるからな」

男は彼女を剣で貫いた。

脳に膨大な知識を生める。扉を開き、新たな知識の部屋を開く。それは未来の

ノエルが経験した過去で、手にした知識。それを未来は過去に授けた。

自分にはならないように、最悪の未来を変えて欲しいという願いを託して。

目を覚ました。室内のベッドに寝ていたらしいが場所は把握できない。

「ここは…」

「お前の家、地下室だ」

「私の家!?!」

「正確にはお前の母親がいた家の地下だ。俺は特別にここに入る許可を

貰ってる。覚えているかな?俺の名前…幼馴染なんだが」

ノエルは目を丸くした。彼の容姿を見て、だ。栗色の髪を持つ美青年と言う言葉が

似合う容姿に成長していた。

「オスカー…!!オスカー・リューザス!!」

「良かった。お前に限って幼馴染の名前を忘れるとは思ってないけどな」

はにかんだような笑顔をオスカーはノエルに見せた。変わらないノエルの様子。

しかし子ども時代より彼女は細かな事に気付く鋭い感覚を育んでいたようだ。

「私をあそこから攫ったのは…攫った人をオスカーは知ってるんだよね」

「…ああ。未来のノエル、彼女は恐らく何度か過去を見てきているんだろうな。

あの人自身の過去には俺の姿が無かったらしい。が、ここでは彼女…最悪の未来に

無かった一つのピースとして俺がいる。聞いた時は驚いたが納得

するだけの

根拠はあったから、引き受けたんだ」

恰好は軍服に似た白地に青の差し色が使われた服。ノエルは純白のドレスに

黒いフード付きのケープを纏っている。それは式典用の正装だ。

「目立つし、着替えろよ。だけど、俺はお前の意志を尊重する。長くは待って

やれねえけど、一週間は待ってやるから」

「オスカーは！オスカーは、どうする気？」

彼の腕を掴んでノエルは聞く。ベッドから上体を起こし、彼を見上げる。

「やるだけやるさ。未来のお前はやったんだろうけど、今のお前がやる必要は

無いだろ。その方が安全かもしれないぜ？」

何かあれば言ってくれと告げてからオスカーはこの部屋を出た。窓がない地下の

一室。無機質な部屋は椅子とテーブル、テレビ、ベッド…ピアノが置かれている。

ピアノ、この部屋に似合わない楽器だ。ふとオスカーの動作が思い浮かんだ。

彼自身、隠しているつもりだろうが一瞬疲れた顔をするタイミングがあった。

軽く肩を回していた。それと妙な立ち方。片足を引き、右手を見せないようにする

そんな立ち方。

「嘘…このピアノ、運んだの!？」

部屋を出てオスカーは別室で氷を手当てしていた。

「痛エ…」

赤く熱を持っている手。？せ我慢して痛みを堪えていたが、もう限界だった。だが

彼女が好きな事をやらせたかった。それが一番効率よくストレス

を消すことが
出来ると知っているから。

e p 3 「奏者と元軍人」

テレビでは式典ピアノが何者かに破壊されたという事件で持ちきりだ。不思議な

事に奏者の方はどの番組でも取り上げられていない。ピアノの修復をし次第、

式典は開くことになっているが修復にはかなり時間がかかるというのだ。

オスカーもノエルも、ほぼ同時にテレビの電源を切った。ノエルは自室に不自然に

置かれたピアノに触れる。ピカピカに磨かれたピアノ、鍵盤に指を置く。

指を滑らせ音楽を奏でる。奏者に選ばれるだけの実力を彼女は持っている。

美しい手、ピアノを奏でるのに適した長い指。その手から、手の持ち主が奏でる

音にオスカーは扉越しに耳を傾けて聞き入っていた。

「オスカー、そこにいるんでしよう」

「…よく気付いたな。相変わらず耳は良いのな」

「耳は、って何？入って来なよ」

扉を開くとノエルは変わらず白いドレスに身を包んでいた。

「ありがとう、ピアノ運んでくれて」

「いや、元々そこにあつたよ」

「ふうん…じゃあ、そういうことにしてあげる」

オスカーは下手な誤魔化し方をする。その真実を察しているノエルは彼を茶化す

ように言う。

「まだ、どうしたいのか…決められなくて、ごめんね。なるべく早く答えを

出すから」

「良いんだ。急いで出るような答えじゃねえだろうし」

浮かない顔をして、中々答えを出せないことに焦り苦惱するノエルの隣にオスカーは

座り、語り掛ける。

「世界を救う…なんてデカイ事を考える必要は無いと思うぜ？」

地下から見える景色は無い。今、空には太陽があるのか。晴れているのか、雨なのか

曇っているのか、分からないが少なくとも心の中にあつた分厚い雲は徐々に薄く

なっていた。

「お前が最も邪魔されたくない、消されたくないものが消される…それを阻止する

為に動いたって罰は当たらねえよ」

「…そうだよ。私たちは英雄なんかじゃないものね。もつと簡単な理由が、

廻り巡って周りの平和に繋がる…そう考えればいいのか」

「で、どうする？ノエル。俺は無理強いはしないぜ」

「勿論、やるよ。そこまで言われたらね」

オスカーが差し出した手をノエルは握った。オスカーが立ち上がり何かをノエルに

投げ渡した。

「その服じゃあ、目立つだろ。すぐに式典の奏者だとバレる。着替えるよ」

自分が奏者だと言いつらしながら歩いているようなものだ。オスカーから貰った

服に袖を通した。白を基調としているのは変わらないが橙色の差し色が

使われたお洒落なドレスだ。

「似合ってるじゃん。さあ、外に出ようぜ」

「似合ってるじゃんって…オスカーが選んだんじゃ…」

「その服、お前の母親が選んだ服だからさ」

外に出ると、そこには家の焼け跡が残っているだけだった。この家

は焼かれ、

残っていた女性も焼死した。母の顔も、この家も、今や記憶の中にしか存在しない

どれだけ惜しんでも戻って来ない過去である。その過去の悲しみを胸に、未来から

託された願いを今の自分の為に叶える。それはきつと巡り巡って多くの人々の

為になると信じている。

旅立ちの街イグネシアス。その街をスタート地点に二人は動き出す。片や式典の

奏者、片や奏者の幼馴染。

「でも、オスカー。私、戦う術を持っていないけど大丈夫…かな？」

「どうにかなるさ。自分で戦う時が来るまでは俺がしっかり守るから安心しろ」

と、心強い言葉を受けた。

「オスカーはここに来る前、私と別れてから何をしてたの？」

別れる前。ずっと一緒に行動を共にしていたがオスカーは突然、自分の近くから

姿を消していた。消した後はどのような生活をしていたのか知りたかった。

「軍人養成所。色々訓練を受けて、無事に軍人になったけど今はその仕事から

外れてる」

「…クビ？」

「かもしれないな。探せば仕事は幾らでもあるさ。元・軍人ともなれば心身ともに

頑強だ。就職にも便利な経歴だよ」

ポジティブな。安定した仕事、公務員、軍人。それもまた次の仕事の為に使える

経略としている。

「訓練って…どういう？やっぱり厳しいの」

「こつちの軍の鍛錬、厳しい。と言つても、幾つかのクラスに分けられるときが

一番厳しいんだ。それで人を落として、残った人間を軍人に任命する」

それだけ軍人には力が求められるのだろう。頭脳、体力、その他にも求められる

ものがあるのだろう。この学校以外にも軍人になれる学校はある。「推薦された。言葉巧みに、な…でも良いんだ。そのおかげで俺は自分の身と

他人を守る術を覚えた。過去なんか関係ねえよ。過去が無ければ、今は無いんだ」

辛かろうが苦しかろうが、その過去の積み重ねの上に現在がある。過去は変えられ

無い。だが未来は変えられるのだ。歩き始めた二人。その後をつける何者か、

ノエルは後ろを振り向いた。それは身を隠し、息を潜める。ノエルは目を伏せ、

聴覚をフル活用する。微かに息を吸って吐く、呼吸の音が聞こえる。

「どうした、ノエーッ！」

オスカーの口をノエルは塞いで、囁く。

「誰か…もしくは何かの後について来てる」

「ホントか？」

ノエルは頷いた。

「ここは敢えて気付かなかった振りをして炙り出しましょう」

「だな…下手に暴くよりも、捕まえて色々吐かせた方が良さそうだ」

ノエルとオスカーは知らないふりをして先に進む。

ep4 「盗賊に間違われて」

先へ進み、とある町へやって来た。商業の街ナツピル。行商人が集まる場所で騒ぎが起こっていた。

「た、大変だ!!盗賊だ!」

誰かが叫んだ。盗まれたモノは青の天霊石の欠片だという。青の天霊石自体が

希少なものの。澄んだ水がある場所に現れる神聖なマナの水晶だ。その欠片を

何者かが盗んだというのだ。その犯人を欠片を持っていた人物の従者が

追っているという。

「貴様だな、欠片を盗んだのは」

オスカー・リューザスの首筋に研がれた刃が当てられている。槍を握る少女は

威嚇するような声を出す。

「答えろ。欠片を何処へ隠した」

「俺はオスカー・リューザス。ここに来たばかりだ。その強盗は、誰かを

連れていたのか?」

オスカーは振り返ることなく、淡々と告げる。彼は一度ノエルに目を向ける。

槍を持つ少女は「いいえ」と答えた後に「ですが…」と続ける。

「誤魔化そうとしたって、そうはいきませんよ。周りに溶け込むために彼女を

攫って脅している…違いますか」

「ちよつと! 私たちはホントにここに来たばかりなんですけど!」

「嘘!まさか脅して言わせるとは…言語道断です!」

槍が一度首筋から離れ、首を切り裂こうとする。その刃をオスカーは伏せて躲し

間合いから抜ける。彼はノエル・ステラ・メビウスの手を引き、人

混みに

逃げ込む。こんな場所で下手に剣を振るつたとなれば余計に目立ってしまう。

木を隠すなら森の中、人を隠すなら人の中、だ。

「はあ…大丈夫か、ノエル」

「大丈夫…それにしても本当に話を聞かないんだね、あの人」

「何処にでもいるさ、相手の言葉に耳を貸さない頭の固い人間が…。ああいう奴は

年寄りだけだと思ってたんだけど」

一つ咳払いが聞こえた。先の少女だ。小柄な少女は槍を構える。

「何と言われようと構いません。ここで捕らえて見せます！」

「オスカー」

「分かってる」

オスカーは真剣、ではなく鞘に納めた状態の剣を構えた。それを見て少女は

不服な顔をする。

「私のような小娘には抜く気は更々ない？舐めないでください！私はナツピルの

大商人ヘルエナ・ジクザスの従者キリカ・ムーシエ！貴方のような悪党に

負けるはずがない！」

この町でも有名な富豪に仕えるキリカの槍捌きには目を見張るものがあった。

しかしオスカーはその攻撃をいなし、躲す。キリカは齒噛みする。踏み込めない、

予想以上に相手は力がある。

「くう…舐めるな!!」

「舐めちやいない。無駄な殺生は互いに嫌だろう？俺も無闇に人を傷付けたくは

無いんでね」

オスカーはまだまだ余裕がありそうだ。その彼を見てキリカは自

身と相手との

実力差を思い知る。何と言う男だ…私はそれなりに実力があると自負している。

男だろうと勝って来たというのに！

「—そこまでだ、こつちに来い！二人とも！」

二人、確信した。ノエルとオスカーを呼んだのだ。オスカーとノエルは壁を伝って

屋根へ上って逃げる。キリカも追いかけてしようとしたが、足元に矢が降る。

「何故…貴方が盗賊の味方をするのですか！」

「お前こそ、もう一度頭を冷やせ」

弓矢を携える男はそう告げて、姿を消した。キリカは地団駄を踏む。逃げられた。

失態だ。屋根を駆けて逃げ延びたオスカーとノエルはようやくキリカから

離れることが出来た。

「助かったよ、感謝する。アンタはどうして俺たちを？」

「君たちが盗賊ではないことを知っていたからだ。俺はグラヴィス・フォステイア、よろしく頼む」

盗賊では無いから助けた。それだけでは納得する理由にはならない。グラヴィスも

それを理解しているので補足する。

「俺も青の天霊石の欠片を盗んだ人物を探している。お前はオスカーと言ったな。」

ジクザスという名字を聞いた覚えはないか」

オスカーは深く考え込み、顔を上げた。聞いた事があった。

「ジクザス…オールド・ジクザス！いや、でも…彼は」

「そうだ。彼は投獄された。名前が広がっていたから、彼の投獄の事件は誰でも

知っているはずだ。ブルーキング事件…青の天霊石が嵌められた王冠を

ルーフィア・ノーチエ・メビウスに公爵の証として贈呈する予定だったのだ」

ルーフィアは祖母の名前だ。ノエルの祖母、だが公爵になるはずだったということ。

どういうことだ？自分は公爵でも何でもない一般人だ。

「贈呈式の際に、メビウス家の事を悪くオルドは周りに広め、異議申し立てを

したんだ。オルド・ジクザスは権威のある男だった…後は…」

グラヴィスが押し黙り、代わりにオスカーが先を伝えた。ノエルも先を察した。

「ブルーキング事件つてのは平たく言えば非公式、一方的な決闘によりオルドという

男がルーフィアさんを殺害した事件だ」

実際に関わったわけではないが、知っている。有名な事件である。同時に

あつという間に消えてしまった事件でもある。そして王冠の行方は分からない。

オルドの口から聞くことも出来ず、ジクザス邸宅をどれだけ探しても発見することは

出来なかったという。

「キリカがその過去を知っているかどうか分からないが…今の当主は王冠の

行方を知ってるんじゃないか。そんな話が噂の範囲内で流れてる…そういえば

グラヴィスさんは彼女の事で何か知らないか」

オスカーはグラヴィスに尋ねる。オスカーやノエルからのキリカへの評価は

少し頭が固い。よく言えば生真面目な性格だ。そして一度信じた事、もしくは

自分が信頼を寄せる人間の言葉を信じて疑わない。

「俺からも同じだ。生真面目であることが悪いとは言わないが、少々

柔軟な

思考に欠ける…彼女の戦い方は基本的に型から外れることが無い」

「…何だか彼女の教師みたいだな」

ノエルの言葉は的を射ていた。

「ああ、彼女に槍を教えたのは俺だからな。先も見せたが、俺の主要武器は弓。」

槍はあくまでサブウェポンだ」

「だとしたら、彼女の才能か。もっと鍛えれば彼女はもっと有能な護衛になると

思うが…」

e p 5 「大迷宮ラビリンス」

グラヴィスは街中を歩く。盗賊の話は臃げな容姿と、彼をジクザス家の従者が

追いかけていたという話が広まっていた。

「おお、あそこの従者は腕っぷしがあるからなあ…安心だな！」

「盗賊如きが勝てる訳ねえよな！」

酒を飲む男たちがそんな話をして笑っていた。グラヴィス・フォステイアは

自分の隠れ家に戻った。そこにノエル・ステラ・メビウスとオスカー・リューザスを

匿っている。

「やっぱり盗賊の話で持ち切りですか？」

「ああ。キリカは相当町の者に信頼されている様だ。彼女が盗賊を追っているから

盗賊はすぐに捕縛されるだろう、と」

キリカ・ムーシエ、槍の使い手。彼女の实力はナツピルでも指折りらしい。

彼女が仕えるジクザス家の邸宅で、ヘルエナ・ジクザスの前にいた。

「申し訳ありません、当主様」

「良い良い。男と共に娘がいたと言っていたな」

「はい」

「その娘、こんな容姿では無かったか」

ヘルエナが写真を見せた。写っている女性の姿を見てキリカは目を丸くした。

オスカーと共にいた少女と似た顔立ちの女性だ。

「ルーフィアとか言う女の孫か…ソイツも確保せねばなるまい。グラヴィスの事だ。」

あの喰えぬ男はそのうちここに来る」

ヘルエナは髭を摩る。ルーフィアという女。彼女の殺害をキツカケに自身の父は

投獄された。投獄されて当然なのだが、彼女によって王冠の力は封じられた。

その力さえ手に入れば自分は良い。自分だけの庭を作れる。

「太古の大迷宮ラビリンズ、か…」

ヘルエナは一人ぼやいた。

夜になり、ノエルはすぐに眠ってしまった。グラヴィスとオスカーはまだ起きている。

「ラビリンズ？」

「そうだ。謎が解明されていない、天から地への究極の難題ラビリンズ」

「迷宮の名前か、それとも別か…どっちだよ」

「…人を指す」

特定の人物、その血族を指すラビリンズと言う名前。地上の民による推測は

広まっているが真実が不明、それ故に大迷宮^{ラビリンズ}。その血族の名前を—
という。それを聞き、オスカーは驚愕した。

「ラビリンズの力は人間では手に余る。故に危険だ。強大な力は人間の誘惑を

増幅させる。もう、既に知れ渡っているかもしれない」

「なら、守るだけさ」

「何を言っているんだ。お前だけでは…!」

「アンタも加われば良いじゃないか。ただし、俺はラビリンズの友人として

守る。ラビリンズが人として生を謳歌するために隣で守るだけ」

幼馴染として、ラビリンズのささやかな幸せを守るために隣に居続けると彼は

宣言した。そしてグラヴィスに試すように問う。

「アンタはラビリンズを人外として神格化して守護するのか、それとも人としてのの

生を守るか、一体どっちなんだろうな」
言うだけ言ってオスカーもベッドに横たわった。

「」
グラヴィスはオスカーの隣のベッドで眠るノエルに目を向けていた。人らしく

生きる権利はラビリンスにもあるはずだ。だが人として多くの人々がいる場所で

悪意から守り抜くのは難しい。だがラビリンスにも生活がある。それを突然

奪うなど…。

朝になり、最初に眠ったというのに一番最後にノエルは起きた。

「よっ、ぐっすりだったな」

「寝心地が良すぎて…もっと眠れたかも」

ノエルは酷く、この隠れ家のベッドが気に入った様子だ。

「突然だが、今日ジクザス邸に行こうと思う」

「本当に突然だね」

グラヴィスの言葉にノエルは驚いた。

「隠れていても、疑惑は晴れないだろう。疑惑を晴らすためにある秘密を

暴こうと思う」

ジクザスが抱える秘密は汚点となり得る話だという。長年、ブルーキング事件後から

ずっと彼らが隠し続ける。栄華の裏にある秘密をグラヴィスは知っている。

「それを暴くためにはお前の、君の力が必要だ。ノエル・ステラ・メビウス」

グラヴィスは真っ直ぐノエルを見る。彼の不敵な笑みに釣られて、ノエルもふと

笑みを浮かべた。

e p 6 「青の恩寵」

ヘルエナ・ジクザスが住む屋敷。その門を潜り抜ける者がいた。彼らのもとにヘルエナの雇った兵士たちがやって来て、武器を構える。

「待て！お前たち。彼らを通すように当主様から命令が出されてい
る」

奥からやって来たキリカ・ムーシエはオスカーたちに目を向ける。
キリカは一礼し、

彼らを屋敷の中へ案内する。その間、必要最低限の事しか彼女は話
さなかった。

粗相のないように、それぐらいか。

部屋の中にいたのはヘルエナだ。壮年の男は腕を組み、優雅な佇ま
い。

「やあ、ようこそ我が屋敷へ。座りなさい」

彼らは席に座った。下手に抵抗する必要は無い。キリカは当主の
斜め後ろに

立つ。オスカーたちは皆、ヘルエナの顔を見る。

「いやあ、すまなかったね。だが青の天霊石の欠片は非情に価値のあ
る宝だ。

それに盗賊の容姿と一致していてね。君たちには色々と話を聞か
ねばならない」

「ならば俺から聞きたいことがある。キリカ、お前はその盗賊と実際
に戦ったか」

オスカーはキリカにそう質問する。何の意味がある？ヘルエナと
キリカは戸惑いを

隠せないが一先ずキリカは真摯に答える。

「はい。ですが、実力の底は見切りました。次に現れても、倒せます」

「…先は手を抜いてすまなかった。もう少し、本気で手合わせをしな
いか」

「どういう意味ですか」

「そのままさ。盗賊の実力と俺の実力を比べれば良い。戦った者しか、それは

分からないだろう?」

オスカーはヘルエナに目を向けた。正式な決闘を申し込むという。「良からう。では準備しよう」

ヘルエナが重い腰を上げた。彼らは揃ってこの屋敷に存在する決闘の場を

訪れる。円形の決闘場の中心にキリカとオスカーが向かい合って立っている。

オスカー・リニューザスは鞘から刀を抜いた。その武器を見てキリカは戸惑う。

「これも俺の武器だ。始めようぜ?」

「ええ。キリカ・ムーシエ、参ります!」

キリカは槍で突きを放つ。突く、薙ぐ、槍の主な攻撃方法だ。隙を見て、オスカーは

踏み込む。

「地統剣術壱式・蜈蚣ごこうノ太刀」

キリカはオスカーを目で追い、槍を振るう。しかし彼を捉えることが出来ず焦る。

一瞬のまばたきでオスカーは強烈な踏み込みから突きを放つていた。刃は首に当たる

寸前で停止する。

「くっ! まだまだ!!」

キリカは槍を振るうがオスカーを捉えられない。戦いを見守るグラヴィスは

共に同じように見守っていたヘルエナに話を振った。

「ラビリンズを知っていますか」

ヘルエナはピクリと反応した。

「無論、知っているとも。それがどうしたのかね?」

ヘルエナの訝し気な目がグラヴィスに向けられている。グラヴィスはその視線を

浴びつつ平然とした態度を貫く。

「ラビリンスの力…それを貴方は知っている。子々孫々に語り継がれている。

青の天霊石の欠片は貴方が持っている」

「何を馬鹿な事を…」

「ルーフィア殺害をしたのは、その力を独占するため。殺した後だけに力を

手に入れるためだった。これは推測、だからこれから確かめましょう」

ヘルエナは不敵に笑った。鼻で笑った。馬鹿な話をし続ける男を笑ったのだ。

その事件は事故だ。決闘中に起こった事故、もしくは別の何者かによつて

起こされた事件だ。こちらには何の非も無い。

「彼女の力に呼応しなければ、私は非礼を詫びましょう」

「何を、何を言っている!? そんな小娘が!? ルーフィアの孫の力はまだ—ッ!」

ヘルエナは慌てて口を塞いだ。口が滑った。グラヴィスの言葉が何度も心を揺らし、

平常心を保てなくなつたゆえのミスだ。こうなつては仕方がない。ヘルエナは懐から

銃を抜き、引き金に手を掛けるもその銃は切断されて使い物にならなくなつた。

斬撃を飛ばした人物はキリカと対峙しているはず。

「—地統剣術式式・螳螂とつろうノ太刀」

オスカーは刀を下ろした。鋭い目をヘルエナに向ける。ノエルはそつと手を組む。

ノエルが放つ光、反応を示すヘルエナの指輪が強い青の光を放つていた。

「ま、待て! 何処へ行くのだ、天霊石よ!!」

指輪に嵌められていた天霊石が離れていく。青いマナの塊となり、

それは

オスカーの前にやって来た。マナの塊は意志を持っているよう
で言葉を口にする。

『我、崇高なる知性と忠義を併せ持つ者を望む』

「知性だど!? それなら私の方が持つている! 何故貴様なのだ!! キリ
カ、命令だ!

ソイツを殺せイ!!!」

必死になるヘルエナはキリカに命令する。人を殺せ、その命令を受
け入れることを

キリカが躊躇した。

「何をしている! 命令だ! 殺せ!!」

「くっ…承り、ました…!」

上からノエルは叫んだ。

「オスカー! キリカを殺さないで!! 殺しちやダメ!!」

「分かってる!」

オスカーはそう返す。ノエルはヘルエナに目を向ける。何が何で
も、あのマナを

手に入れたいようだ。

「メビウスの名において彼の者に青の恩寵を」

ノエルは思いついた事をそのまま口にする。青いマナの塊はオス
カーの体内に

入り込んだ。そして彼の体に馴染む。

「これは…」

「やあああああッ!!!」

声を荒げ、先よりも粗暴に槍を振るう。キリカ表情は泣く寸前で
ある。オスカーは

刀を構え、攻撃から身を護る。そしてヘルエナはその様子を鬼の形
相で見ている。

e p 7 「絶水剣」

「く、クソツツ!!」

「何をするつもりだ」

ヘルエナ・ジクザスが徐に取り出したのは掌サイズの宝珠だ。ノエルの耳に、脈打つ

ような音が聞こえた。グラヴィスは顔を強張らせる。ノエルは息を呑んだ。これは

ただの宝珠ではない。ヘルエナは勝ち誇ったような笑みを浮かべて、説明をする。

「青の恩寵が何だつて言うんだ！これはその祝福さえも凌駕する神からの真なる

祝福だ！勝てるわけが無かろうが!!」

「使うな、ヘルエナ！そんなものは祝福ですらない。人の理性も、秩序も破壊する

瘴気の塊だ。人間が、生物が手にして良いモノではない!!」

禁忌とされ、存在を全ての記憶から抹消された災厄。ヘルエナが持つその正体は

害となるマナの塊、災玉という。知っている者はいないともされている道具を持ち、

ヘルエナは行使する。誰から教えられたのか、誰から手に入れたのか。分からない。

声を荒げ、ヘルエナの体が異形の物に変化した。

「黒い…竜！」

大気を振るわせる咆哮を放つ。決闘場の石段が砕けて、吹き飛ぶ。黒い竜は

大きな羽を広げる。

「瘴気による竜化には段階がある。加えて個人差もな。普通に暮らしている者、

特別瘴気に強い人間ならば竜化はしない、竜化は一定の範囲で停止する。しかし

瘴気に侵された人間が誰かに害を為すような事を自主的にしていた場合などは別。

竜化の速度は速い」

ヘルエナは悪になるようなことをしていた。反省もせず、自己中心的な性格の

彼の竜化速度は常人より早い。グラヴィスは矢を番える。狙いを定めて、矢を

放つも、それを簡単に弾いてしまった。

「うわっ！」

「ヘルエナ様!!きやああああ!!!」

竜はキリカの体を掴んだ。最早、彼女の姿など映っていない。どんなに藻掻こうと

人間の力では竜の握力から逃れることは出来ない。

「ならば、斬り落とすだけだ」

「無茶だ！竜の表皮は並の斬撃では傷付けられんぞ！」

グラヴィスは身を乗り出して叫んだ。その声を遮るように巨大な翼を広げ、

大きく咆える竜。オスカーはその声を無視して跳躍する。

「絶水剣ブルースター」

振り上げていた剣を落下と同時に振り下ろした。青いマナで覆った巨大な刀身は

頑強な竜の装甲をもとめせず腕を切断してしまった。痛覚があるように竜が

苦しむような声を荒げ、巨体を暴れさせる。共に落下するキリカを自分の方に

引き寄せてオスカーは着地した。

「当主様…」

キリカは悔しそうな顔をしていた。知性と忠義、どちらも自分こそが持っているはず

だというのにどうして彼が選ばれているんだ。理解できなかつた。認められない。

「キリカ」

「グラヴィスさん…」

「どうして、そう言いたげだな」

「だって、私の方が一人に対して強い忠誠心を持っています！知性だって、

私は全てをあの人の為に―」

グラヴィスは首を横に振った。それを全て否定したのだ。

「それは本当か。青の恩寵が望んだ形とはまた違うのではないのか」

「そんなことはあり得ない！」

グラヴィスの言葉すらもキリカは否定した。

「盗賊に青の恩寵は力を貸さない。人を信じるなどは言わないが、少し

疑うことを覚えろ。生真面目なのは良いが、時には柔軟に…な？」

キリカは渋々と言う風に頷いた。確かに自分は少し頭が固かったのかもしれない。

既にノエルやオスカーの注意は竜に向いていた。旋回する竜もこちらを睨んでいる。

「キリカ、今決めろ。このまま当主の悪事を見過ごすか、俺たちに協力するか」

「―ッ、知っていました。ヘルエナ様が良からぬことを考えていることも、

彼が悪事に手を染めていることも…それを認めたくなかった…！もう、眼を

逸らしたくない!!」

キリカは槍を握り、一步前に出てオスカーの横に並ぶ。グラヴィスは弓を握り直す。

「俺が援護をしよう。思った通りに攻撃してくると良い」

「ノエル、お前も下がってろよ…あ、いや、お前もサポート頼むぜ」
「任せて！」

四人は竜に攻撃を仕掛ける。ノエルが展開したマナの踏み台を使ってオスカーと

キリカは竜との間合いを詰める。

e p 8 「力の発端」

竜と三人の戦士、そして見守る者。グラヴィス・フォステイアは隣で心配そうに

二人を見守るノエル・ステラ・メビウスにある事を教える。彼女が自覚していない

力のキーワードをグラヴィスは知っている。

「君だつて戦えるとも。自分が思った通りに動くが良い。直接手伝いたいのなら

行つてきなさい」

グラヴィスに背中を押されてノエルは宙に作つた足場に立つ。果敢に立ち向かう

キリカ・ムーシエとオスカー・リューザスのように勇ましく戦えるのだろうか。

グラヴィスのように上手く立ち回れるだろうか。竜は巨大な翼を広げ、力を誇示する

ように叫ぶ。その圧力に吹き飛ばされそうになるのを耐える。

彼女の背後にいるグラヴィスは分かっているがオスカーやキリカから見れば

ノエルは無謀にも突っ込んできているようにしか見えない。だから彼らは制止

しようとするもオスカーは途中で声を掛けることをやめた。

「何か、考えがあるんだな…ノエル」

マナを操り、空中に道を創る。その先には竜が待ち構えている。決して面を

上げず、右手を腰に回し剣を抜こうという姿勢で駆ける。彼女の道をオスカーと

キリカが開いてやる。

「一式・螳螂ノ太刀！」

「一日華槍！」

二人が道を切り開き、後数メートルと言う場所でようやくノエルは

顔を上げた。

大きく一步踏み込んだ。

「百の竜を穿つ、戦士の剣―ドラゴ・アーツ・デストロイア!!」

その詠唱通り、竜に対して絶対的に滅する剣。上から下に剣を振り下ろす。

一瞬の間において竜の体が二つに分裂する。叫ぶ暇も無く、竜の体が消滅する。

白銀の炎に全身を包まれるのだ。

今回の事件、ヘルエナ・ジクザスの悪事が暴かれた。彼は逮捕されたのだ。

「キリカはどうするんだ」

「ご迷惑でなければあなた方について行こうかと思っていますが、よろしいの

でしょうか」

キリカは生真面目に確認する。

「うん、大丈夫だよ。それで聞きたいことがあるんだけど…さっきの自分にも

関わってたんだけど…」

「大迷宮ラビリンス、だろ。分からないことがあると、なんかモヤモヤするからな。

もう教えても良いんじゃないか、グラヴィス。力は僅かながら使えている。俺も

知りたい。アンタは何を知っている」

グラヴィスに視線が集まる。

「俺から伝えることは難しい。ただラビリンスと言うのは一族の、メビウス家の

本来の名前であるという事ぐらいだ。ラビリンスと言う名前は古き時代、メビウスの

異端な力を見た者たちが呼んで根付いたとされる」

「古い時代ではマナ、それを使った魔術を扱える者は神の化身ともされてきました。

今では誰でも、いえ例外もありますのでほとんどの人が扱えますが
…メビウス家は

代々与える力を持っているともされています。実際、その力を扱えたのはその家の

先祖だけだとされています」

キリカはグラヴィスの説明に補足した。彼女も少なからず、ラビリンスを知っている

らしい。メビウス家の事を指すと同時に同名の古代兵器も存在するとされている。

その起動方法は不明。グラヴィスは多く語ることが出来ないと言った。

「それだけラビリンスというのは歴史の中でも、世の中でも重要であるという

ことだ。同時に古代兵器もあると聞く。今の私では、君たちが知りたいことを

伝えられない」

「なら、それを調べられる場所は」

「あまり多くはないだろう。そもそも一般人どころか、国の上層部でも限られた

少数しか知らない名前だ」

語れぬ知識。一先ず、グラヴィス・フォステイアとキリカ・ムーシエと共に

この町を後にする。別の場所で、真実を見つけられるように。